第2期黄金時代の建設

港湾を大拡充、工業都市に
留萌地区経済圏の共栄を確立

留萌市は、ここ数年着実な発展を続けています。昭和三十五年度の総生産額は同三十年に比らべ約七三%の伸びをみせたことでもおわかりでしょう。

しかし、貿易港を持つ留萌市は、さらに大きな将来をめざして前進を続けなくではなりません。

飛躍的発展への土台でもあつた留萌市の財政は漸く軌道にのりました。そこで第二期黄金時代を留萌に築くため、大留萌建設計画がクローズ、アップされてきたのです。

昭和のはじめ、大きな夢をのせて開港した留萌港を持ち、さらに、ニシンの豊漁に酔いしれて、当時の留萌は第一期黄金時代の到来に、わが世の春を謳歌していたのです。

全道各市に先きがけていち早く上水道施設が完成したのもこの頃です。

しかし、打ち続く戦争によつて平和な発展の夢は破られ、平和な戦後にはいつても経済基盤の弱体から目先きの繁栄ーつまりニシンの豊漁による経済の好転に酔い続け、計画的な経済安定は、まるで忘れられたかの感じがあつたのではないでしょうか。

これは、三十年を中心とするニシンの凶漁によつて砂上の楼閣の仮面が、むごたらしいほどにひきはがされてしまつたのです

基礎は固まつた
財政の健全化もあと一息

とくに、これら計画的な施策の推進母体である市の財政は、一億二千万円の赤字にのぼり、すでに資金繰りさえ満足にできない苦しい状態に追いこまれたことは、将来への飛躍的発展に大きな障害となつてしまつたのです。

そこで、市はこの財政基盤の弱体を建てなおすことが先決問題であると、さつそく二十九年財政再建計画にのり出し、年次計画でこれを健全なものとする一方三十二年には、これとあわせ将来発展への土台となる経済基盤の整備を主柱にした第一次市勢振興計画（五カ年計画）を樹てました。

この計画的な行政の効果は、れき然としてあらわれてきたのです。

財政の好転は、市中への順調な支払いとなつてあらわれ、公共施設への設備投資が続けられ、学校の新築上水道の拡張、市庁舎の新築などにあらわれてきました。

また、市勢振興計画の成果は、道路の整備、鉄道網の整備（ジーゼルカーの導入、輸送のスピード・アップ）北岸ローダーの建設など数多くの基盤が整備されてきました。

こうして、財政もあと一年で当時の赤字を完金に解消するまでになつたのです

人口十万臨海工業都市を
市勢振興十カ年計画樹立

そこで、こんどはこの整備された土台の上にたつて飛躍的な発展をめざし〃第二次市勢振興計画〃を樹てることになりました。

この計画は、いわば大留萌建設計画であり、〃第二期黄金時代〃を留萌市に建設しようとする画期的な長期計画で、昭和三十六年度から昭和四十五年度までの十カ年計画、これを前期五カ年、後期五カ年にわけて進められます。

まさに、留萌市民のみなさまが同じように長い間念願していた〃第二期黄金時代〃を実現する長期計画ですから、できるかぎりの留萌市将来の姿をこの計画にもり、実現しようとしています。

つまり、㊀留萌市勢発展の生命線でもある留萌港を飛躍的に拡大すること。㊁近隣町村経済圏の共栄体制の確立という二つの大きな主軸の上にたつて、人口十万の臨海工業都市の建設という飛躍的発展を実現しようというのです。

第二港灣と臨海工業地の造成
留萌港を大拡張

〃貿易港　留萌〃は、小樽、函館、室蘭につぐ重要港湾の一つとして、南に増毛町、北に羽幌、天北、稚内、東に旭川、札幌、小樽につらなる二級国道と鉄道を産業開発への大動脈として持つ道北開発への心臓部であります。

しかし、残念なことには当時留萌港を築いたのは、道内から生産物を積み出す中継港としての性格、小樽港の副港的な性格をもつたものに過ぎなかつたのです

これでは、これから発展させようという時代にあわないのは当然です。

すでに　留萌港はたとえ中継港であつても全国的な経済成長にまにあわないのです。

こゝで将来の大構想にたつた港湾大計画を実現しなければなりません。

通産省が指定した道内工業地帯である宗谷工業地帯士別、名寄工業地帯　旭川深川工業地帯、滝川、芦別工業地帯、それに留萌工業地帯の五つの工業地帯は、いずれも留萌港の経済背後港地帯として考えられています。

こうした中で、わが国経済の著るしい成長と北海道第二期総合開発計画の強力な推進により、物資の輸送が十年後には三倍以上に達することが予想されています。

留萌港も北海道の西北部の門戸として、開発上重要な使命をおわされることになつたのです。

したがつて、橋本市長が十二月二十八日明らかにした構想も　これらの点をとり入れて推進しようとしています。

この構想は事業年度を三十六年度から四十五年度までの十カ年計画とし、これをさらに三十六年度から四十年度までを前期　四十一年度から四十五年度を後期としています。

前期計画は、後期計画を進める上に支障のないていど、緊急事業を実施し、続く後期計画か全部終ったときは　石炭二百万トン余木材（輸入を含め）三十五万トン、雑貨五十万トン、その他三百万トンの呑吐能力を持つ大港湾にする計画です。

すなわち　前期計画では現在ある留萌港の内港、外港、副港など海陸全域にわたり利用度を高めます。

後期計画では、瀬越浜から礼受岬まで一帯の海面三百三十五万平方米を画し、その北部に被覆面積百二十二万平方米を持つ第二港湾（南港）を新らたに作り、背後の丘陵を切りくずして海を埋立て四百二十万平方米の臨海工業地を造ります

このほか、留萌川を浜中町付近に切りかえ、その下流を木材の水中貯木場とします。

こうして　第二港湾の築造とそれに連らなる臨海工業用地の造成に百五億　現在ある留萌港の大整備に四十五億を投じ、東岸壁の堀削、貯炭場の拡充　副港のしゅんせつ、北岸ローダーの増設、北岸船溜の完成、水中貯木場の設置、保安地帯の造成などを行おうとしています。

しかし、こうして整備、拡大する港湾は、とりもなおさず工業港として、港に生産性と市場性を持たせたものにすることであり、この港湾を中心にして工業都市に作くり変えようというものです。

ですから、留萌港を中心とした工業用地として、浜中町の第二港湾に丘陵を切りくずし、海を埋め工業用地〃新らたに作くるほか、春日町にも新らしく作くり留萌市堀川町地区、増毛町信砂地区、小平地区とあわせて総面積四百二十万平方米の工業用地を整備します

さらに、工業誘致の最大のガンといわれた工業用水の確保のため、暑寒川、箸別川、信砂川の自然流水を箸別川の下流一カ所に集め大貯水池を作つてこれをあてる構想です。

これでも不足の場合は、留萌川の切りかえにより、㊀南町からずい道で浜中沢に落す（工費十六億円）㊁留萌製紙工場地点から神社前をずい道によつて西病院に落す（下水道の完成とかみあわせ八億円）の方法があげられています。

〃留萌地區經濟圏〃の共榮を推進

しかし、このような飛躍的発展は、ひとり留萌市のみの力ではなしえません。

留萌港の経済性を同じくするもの同志が力をあいおぎないあうことが必要です

こうした考えにたち、この計画では、経済、社会全般にわたつて共通した近隣町村が提携して、「留萌地区経済圏」の共栄体制を確立しようとしています。

このような二つの大きな主軸を中心にして、総合的な市勢振興計画が樹てられ積極的な計画施策が行われそこに〃第二期黄金時代〃が実現されるのです。

なお、さらに橋本市長は近くこれら市勢振興の具体的計画を発表、専門的なもの、あるいは今後の運営面について市内有識者、関係者の批評を得て、中央との強力な折衝を行い、この第二期黄金時代の実現にのりだそうとしています。

＝写真＝

留萌線には、ジーゼル準急〃るもい〃がフルスピードで走つてゆく、しかも藤山町付近では国道との立体交叉路ができるのも間近かい